



YUGAO

A certain summer evening, Genji noticed a shabby house with white flowers or green ivy. The name of white flower was YUGAO.

Genji wanted the flower. A maid in this house handed the flower of Yugao on a fan.

Tanka was written in that fan by a woman in this house.

Her name was YUGAO.

I wonder if he is Genji no Kimi. The glow of Yugao make me more beautiful.

I want to see Yugao flowers(you) closer because I watched it in the evening.

The moon hides behind the clouds and the twilight sky was really beautiful. It's like the woman.

A woman said .

『If, without knowing mountain's(Genji) heart, a moon (Yugao) may disappear on the way 』

She looked lonely. But he felt that the reason was her solitary house.

夕顔 (原文)

切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉開けたる。

「をちかた人にももの申す」

と独りごちたまふを、御隨身ついで、

「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ咲きはべりける」

と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、このもかのも、あやしうちよろぼひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに這ひまつはれたるを、

「口惜しの花の契りや。一房折りて参れ」

とのたまへば、この押し上げたる門に入りて折る。

『心あてにそれかどぞ見る白露の光そへたる夕顔の花』

『寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔』

いさよふ月に、ゆくりなくあくがれむことを、女は思ひやすらひ、とかくのたまふほど、にはかに雲隠れて、明け行く空いとをかし。

女恥らひて、

『山の端の心もしらでゆく月はうはのそらにて影や絶えなむ心細く』とて、もの恐ろしうすごげに思ひたれば、かのさし集ひたる住まひの慣らひならむとをかしく思す。

夕顔 (現代文)

ある夏の夕、源氏は蔓草が青々と茂った塀のみすばらしいその家の前を通りがかり、白い花が咲いてるのに気づいた。白い花の名は夕顔であった。

源氏がその花を求めるとその家の召使いが扇の上にその花をのせて彼に差し出した。扇には短歌が書かれていた。

短歌を書いたのは此の家のもので、彼女の名は夕顔であった。

『あのお方かしらと想像しています。白露の美しさで夕顔の花も一層美しくなります。』

『もっと近くに寄りお目にかかりたいと思います、夕暮れ時にぼんやりと観た夕顔の花を。』

まだ月が沈みそうで沈まないように女は迷っているが、そのうちに月が雲に隠れ、次第に明けてゆく空は本当に美しい。女性は恥ずかしそうにして、

『山(彼)の心も知らないで、そこまで渡ってゆく月(彼女)は道を間違えて消えてしまうかもしれません』

と言った。源氏はそれは彼女がそのような寂しげな住まいに居るせいだと思った。